

中國出土資料學會
平成21年度第1回例会

日時：平成21年7月11日(土)

受付開始 12:30～

研究報告 13:00～17:00

場所：成城大学3号館2階322教室（〒157-0066 東京都世田谷区成城 6-1-20）

会場へのアクセス：小田急線 成城学園駅下車 徒歩3分

報告 報告者：富田 美智江（慶應義塾大学大学院後期博士課程）

発表題目：上博楚簡にみえる后稷説話について

発表概要：現在第七冊まで発行されている馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書』のうち、「后稷」と釈読される語がみえるのは、第一冊の「孔子詩論」、第二冊の「子羔」、「容成氏」の三篇においてである。「孔子詩論」では、后稷の貴ばれる所以が「文武之徳」にあること、「子羔」では后稷の感生説話について、「容成氏」では禹の治水後の后稷の農業法についてと、それぞれ異なる内容が語られている。今回は伝世文献との比較をふまえつつ、これら三篇の後稷説話について考察したい。

報告 報告者：清水 浩子（大正大学非常勤講師）

発表題目：『天子建州』の一考察

発表概要：『天子建州』は甲本、乙本の二本があり、甲本は完全で、十三簡ある。しかし、その中の九簡は、はじめの部分には残欠が一、二文字あるが、乙本によって補うことができる。全文字数は四百七文字であり、完全な簡の長さは約四十六ミリであり、各簡には三十二文字前後ある（上海博物館蔵『戦国竹楚簡（六）』、『天子建州』曹錦炎）」とされている。

しかし、他の出土資料と同様に資料を読み解くことには困難がある。そこで、曹錦炎氏の校釈を基本に『天子建州』を解釈し、曹錦炎氏に対する異論を考察し、『天子建州』に見られる先秦時代の「礼儀」を明らかにしたい。

一番の問題は六簡の後半から八簡の前半にかけての

天子坐、以矩。食以義、立以縣。行以 。 侯量、顧還身。

諸侯食同状。視百正、顧還肩。與卿、大夫同恥度。士視、

目恒顧還 。 不可以不聞恥度、民之義也。

であろう。「侯量」の欠字は「視」であろうことは推察しやすいが、「行以 」、「目恒顧還 」などは色々と考えられる。また、「與卿、大夫同恥度」の「恥度」については侯乃峰氏の「《天子建州》“恥度”解」という考察には「恥度」の「恥」は「止」であり、「礼節」ということであるという説もある。

いずれも「礼」と深い関りのあることであり慎重に考察したい。

報告 報告者：韓 昇（復旦大学歴史系教授）

発表題目：新発見隋代陰寿の墓誌

発表概要：隋代の墓誌は唐代と比較して数が限られるが、それでも近年重要なものが発見されている。二〇〇三年の初めごろ、西安市長安縣の郭杜鎮から隋代の幽州總管である陰寿の墓誌が出土した。陰寿は隋王朝の創立に関わってきた。その後は幽州總管として突厥や高宝寧を破って隋の東北地域を安定させる重要な役割を果たした。墓誌と『隋書』の記事には、かなりの違いがあり、名前さえ違っている。両記事を比較することで、『隋書』を補う重要な情報を掘り起こすことができる。

参加費(資料代)500円

非会員の来聴を歓迎します